からだで味わう音樂

東京高等師範學校教官　井上武士

（一）

つつしみ深い紳士淑女は、身うごき一つしないで靜かに音樂を聞いている。そして音樂が高潮に達すると、眼をとじ、ため息をついて深い感動の氣持をあらわす。ところが音樂的な修養のあまり深くない、純眞な大衆は必らず指先とか、足とか、時によると輕く頭をふるというようなからだの運動によつて拍子をとりながら音樂を聞いている。

いわゆる紳士淑女は音樂的によく訓練された耳によつて直接に音樂をとらえ、そのままこれを心に傳えるのである、しかし大衆は音樂のリズムや旋律の動きを一應そのからだの運動にあわせ、そのからだの運動を媒介としてこれを心に傳える。

まだあんよもできない赤ちやんに輕快なマーチか舞踏曲を聞かせた時、赤ちやんはきつと手や足をうごかしてあばれ出す。そしてじつと見ていると、その手や足の運動を音樂のリズムにあわせようと、もがいているようにさえ思われる。

そろそろあんよのできるようになつた赤ちやんは、決してじつとして音樂を聞いているものではない。必らず手をうごかしたり足をうごかしたり、愉快な音樂になるとおどり出したり、場合によると何か歌い出したりする。音樂的な素質のある子ならば音樂のリズムをはつきりとつかみ、それにしつかりとあわせて上手にからだをうごかし、音樂の抑揚や緩急さえもこれをうまく表現する。ハイドンの父は車輪をつくるかじやだつたが、ハイドンがまだ小さい時、お父さんが仕事場で一服やつていると、お父さんの小さい槌を持つて輪金を打つて遊んでいたそうである。その打ち方がとてもおもしろく、リズミカルだつたので、お父さんは、お母さんに向い『この子は音樂の天才かも知れないよ』といつたということである。少し大きくなると村のお祭の時などハイドンが大人の人にまじつて樂隊をやるようになり、それが實にうまく太鼓を打つた。ところが大きな太鼓を自分で持つことができず背むしの男にしよわせ、そのうしろからハイドン少年が得意になつて太鼓を打ちながら村中ねりあるいたという興味深い話が傳えられている。

幼稚園ぐらいの子になると、何か音樂を聞くと、それを身ぶりに表現しようとする。

このように音樂を聞いて、それをからだの運動に表現しよ

うとするのは、實は音樂を運動に表現するというのでなくて、逆にそのからだの運動をとうして、音樂をその心に傳えようとするのだと私は考える。

大衆が音樂を聞くとき、指先や爪先でしらずしらずの間に拍子をとつているのも、赤ちやんが音樂を聞きながら手足をもがくのも、また幼稚園のお子さん方が音樂にあわせておどり出すのも、結局はその音樂の中に流れているリズムをとらえ、それをからだの運動にうつし、それをとうして音樂を心に傳えようとするのである。

（二）

一般に音樂は精神的なものだと考えられている。そして『作曲家の頭』というようなことがいつも問題になる。一體音樂というものは作曲家の頭、即ち作曲家の精神から生れるものであろうか。

作曲家は鉛筆をにぎつて五線紙の上に樂譜を書く。といつても誰も鉛筆が作曲しているとは思いはすまい。鉛筆をにぎつているのは手だから、作曲家の手が作曲していると考える人もないであろう。その手は結局作曲家の頭、即ち作曲家の精神から生れ出る曲を書いているのだから、作曲をしているのは作曲家の持つている鉛筆でも、手でもなくてその頭――精神だということになる。

結局作曲をするのは、作曲家の頭――精神ということになるのであるが、それではその精神は作曲家のからだと全く分離しているのであろうか。われわれ人間の精神はその肉體と、全然分離しては存在し得ない。作曲家の精神も、そのからだにつつまれていてちよつとした作曲をするにもその精神のはたらきはからだの支配を受けているのである。それは作曲家自身が自覺すると否とにかかわらずしらずしらずの間にからだの支配を受けて、それが作曲という形で表現されるのである。

音樂には二拍子とか三拍子、四拍子、六拍子というようにいろいろな拍子があつて、二拍子ならば『一二、一二』と強い拍手と弱い拍手とが、規則正しく反復されながら進行していく。作曲するときにこの規則正しい拍子を決定するものは結局作曲家の精神のはたらきであろうが、しかしそれを決定させるもとになつているのは作曲家の精神をつつんでいる作曲家の肉體である。

われわれ人間のからだにはいろいろな生理的現象がある。呼吸、脈搏、歩行等、いろいろな生理的現象や、からだの活動はからだの構造の支配を受けて、常に正しく規則正しい「型」即ちリズムを持つている。

まず呼吸をとり上げてみようか。呼吸は年齢や體質や、からだの狀態によつて速いこともおそいこともあるが、息を吸うと息をはくのとこの二つのはたらきを規則正しく繰りかえしている。脈搏も同樣、心臟の辨膜の開くのと、とじるのとこの二つのはたらきに應じて正しいリズムをくりかえしている。このはたらきは年齢や體質、またはからだの狀態によつて速度はちがつても心臟のはたらきにかわりはない。生れてから――嚴密にいえば生れる前から――死ぬまで、夜も晝も

休むことなしに正しくリズムを運んでいるのである。

われわれの歩行も同様である。誰が足の二本あるという自然にそなわつた構造を無視して三拍子や六拍子で歩く人があろう。左足と右足とを交互に出して自然に正しいリズムをくりかえしながら歩く。もちろんわれわれ人間もダンスホールでワルツやメヌエットをおどる時には『一二三、一二三』と三拍子の歩行をつかうが、これは自然の歩行ではなくて藝術的に理想化した形式の歩行である。この場合には足は二本という基本的な原理を適當に處理しなくてはならない。

廣くいえばわれわれ人間の生理的現象や一切のはたらきは陰と陽との二つの部面を持つているのだと考える。更にこれを廣く考えてみるとこの生理的現象や肉體的活動はあらゆる自然界の現象に支配されている。朝と夕、晝と夜、山と河、天と地、火と水、夕と冬、春と秋、これらのすべてが陽と陰との形に於て、われわれ人間を支配し、しかもそれが正しいリズムに整理されている。

なるほど自然界の現象は千變萬化であるが、その中には永世不變の正しいリズムのあることは誰もこれを否定することができない。

このように正しいリズムを持つ自然の中に生れ、生き、生活をしているわれわれ人間の肉體と精神とは、その支配を受けてやはり正しい運行をする。

作曲家の頭から生れ出る音樂とは、結局このような深い因緣をたどつて、そのからだのはたらきの中から生れ出るものだということができるであろう。大天才があらわれて、前人未踏の新手法を發見したように見えても結局はこの天然自然の理法をわれわれ人間の肉體と精神とが許容し得る範圍内に於て、藝術化し、理想化したものに過ぎない。

（三）

つまり音樂は人間の精神から生れるものではなくて、實はそのからだの一切のはたらきや活動の中から生れるものだと信ずる。それは決してリズムや拍子の問題についてだけいわれるものではなく、旋律の抑揚も和聲の進行もみんなその支配を受けているのである。

このようにしてからだから生れた音樂は、からだで味わうのが當然といわなければならない。大衆が指先や爪先で拍子をとつたり赤ちやんが手足をばたばた動かしたり、幼稚園のお子さん方が音樂にうかれておどり出したりするのは、結局このからだから生れた音樂をからだで味わうための一つのいとなみだとかたく信ぜられる。つつしみ深い紳士淑女もなるほど身うごき一つしないかも知れないが、そのからだの中にはきつとしらずの間に動かされている部分があるのである。音樂を聞いているとのどの筋肉が緊張したり弛緩したりして自分にも歌つた時と同じような疲勞があるというではないか。どんな人でも心や耳だけで音樂を味わい得るものではない。

その意味に於て、幼稚園の子に音樂をきかせたり、唱歌を

（二二頁へつづく）

る深い愛の持主となつていたゞきたいと思います。敗戰後の今日、設備も費用も不充分でありますが、たつた一つこれを補うものがありとすればそれは實に保姆さんの子供への愛情だと云えます。この愛情が保姆さんにあれば、ないないずくしの中に立派に新しい日本を背負つて立つ子供になつて呉れることを確信しています。そしてその愛情は幼稚園だけでなく、國民學校に入つた後もなくなるものでなく、幼稚園時代の實態としての保育記錄はそのまゝ國民學校教官の教育に役立つものでなければなりません。又反面國民學校からの觀察の結果を知らせて貰うことによつて、次の保育に精進する力となるものでなければなりません。

最後に國民學校教官への御願があります。今日の國民學校教官の中には、案外保育の效果を輕視される方の多いのは誠に殘念なことであります。『まあ幼稚園から來れば集團生活の結果多少なれているので家庭より初めて入學した子供に比べてよいが、そのうち區別がなくなりますよ。』と云うことを平氣で云う人があります。この教官は、折角幼稚園で啓發した集團生活への芽生えを伸ばすことを忘れて未經驗の子供にのみ氣をとられた結果、悪い意味での劃一にして喜んでいるのであります。折角身についた生活への芽を育てあげるのが今日の教育ではないでしようか。幼稚園から來た子供は慣れすぎていけないと云うが、その長所を伸ばす工夫をせず、又正しい方へ向わせる努力が考慮されずに、保育の效果について近視眼的であることを殘念に思うのであります。私は現在の國民學校の教官が、もつと眞劍に幼兒教育を研究しなければ、到底低學年教育の效果はあがらないばかりでなく、保育の效果まで減殺して竹に木をついだものにすることを恐れるものであります。かゝる缺點を除去するには、前述の樣にもつと國民學校教官に保育を研究していたゞくことも一策ですが、より望ましいことは就學前保育した保姆が教官としての實力を持つて、引つゞき國民學校一年の擔當教官となることが理想的だと思うのであります。

（一五頁よりつゞく）

歌わせたりするような場合、できるだけこれをそのからだのはたらきにうつたえて味わわせるようにすることが、極めて自然であり、また有效であるということになる。

幼稚園などでよく一つの唱歌を歌わせ、それに大人の人のつけた遊戯を教えているのを見かけるが、私は特に音樂や遊戯に興味を持つて居られる幼稚園の先生方に一つの提言をし御研究をお願いしたいと思うことがある。

それは音樂を聞かせたり、唱歌を歌わせたりする時に、お子さん方の身體的な活動が或る型にはまつた振というものに支配されないで、もつと自由に表現されなくてはならないのではないか。そしてそれが靜かに音樂を聞くとか、先生の口眞似をして歌のふしや言葉を覺えるということに先行しなくてはならないのではないかということである。もちろん大人のつくつた振を教えるということにはまた別な意味があろうが、自由を喜ぶ子どもたちの遊戯性をたつとぶという意味からもこのことを深く研究していただきたいと思うのである。